

人が一人でいるのはよくない。

(『創世記』二章18節)

「地の塵」から造られ、エデンの園に住むことになった最初の人間アダムについて、人が一人でいるのはよくない、と考えた神ヤハウエは、動物を造って彼の前に連れてきた。しかし、動物の中には「彼と向き合う助け手」がいなかった。そこで神はアダムを深く眠らせ、その肋骨をもって女性を造る。アダムは妻エバを迎えることになった。物語はこれに、「このゆえに、人はその父と母を見棄てて、妻と結び合うのである」と注記している。夫と妻との関係は親子のそれにまさる、というのである。夫と妻の関係こそは、愛し合い、助け合って生きる人間の社会関係の基本であった。

ところが、神から禁止されていた「善悪を知る木」の実を食べたことから、夫と妻との関係にはほころびが生じる。実を食べたことを神から追及されたアダムは、その責任を妻に転嫁するのである。妻が蛇に誘惑されて禁断の木の実に手をのばしたとき、彼は妻の傍らにいたはずなのにもかかわらず。こうして、アダムとエバは神から皮衣を贈られて、エデンの東に追放された。アダムとは「人間」という意味である。

一人では生きてゆけない人間の、なにごとにも替えがたい喜びに愛する人との出会いがあろう。しかし、悲しいことに人間は、最愛の人さえも裏切ることができる。アダムとエバの物語をはじめ、旧約聖書には、喜びと悲しみ、優しさと酷さ、愛と憎しみ、美しさと醜さが織りなす人間模様を描いた物語が少なくない。